

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	編集室からのお知らせ
別タイトル	NEWS FROM EDITORIAL OFFICE OF IGAKUKAI
作成者（著者）	東邦大学医学会編集委員会
公開者	東邦大学医学会
発行日	2023.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 70(2). p.85 86.
資料種別	その他
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD75954205">https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD75954205</a>

## 編集委員長交代のご挨拶

中野 裕康

東邦大学医学部生化学講座

今年の3月で東邦医学会雑誌編集委員長の大役から無事退任することができました医学部生化学講座の中野でございます。現在は、次の委員長である船戸先生に仕事を引き継ぐことができ、ほっとしているところです。

就任当初は時々回ってくる原著論文や依頼原稿の採択の可否についての業務をこなすことで手一杯でした。ある日私がその当時よく見ていた Harvard horizons という YouTube チャンネル (<https://www.thecrimson.com/article/2023/4/14/horizons-symposium-2023/>) で、ハーバード大学の GSAS (Graduate School of Arts and Sciences) の学部長だった著名な統計学者である Xiao-Li Meng 博士が、「新しく学部長になった人はとにかく何か新しいことをしようとする、そして多くの場合その試みは失敗する。しかし Harvard Horizons を始めたのは例外的な成功例だ。」というような話を述べていました。私もなるほどと思い、せっかく編集委員長になったのだから、何かしら東邦医学会雑誌の運営に貢献するために新しいことができないかという思いが湧いてきました。そこで教授会で島田先生がいつも言われていた東邦医学会の毎年の赤字の原因になっている東邦医学会雑誌の出版経費をなんとか節約できないかと考えるようになりました。私の前任地の医学部や幾つかの医科大学の雑誌の事務局の人に聞いたところ、やはりどこも医学部や医科大学で発行している雑誌は赤字であり、その他の学内の経費で赤字を補填しているということでした。企業からの宣伝を増やすというような小手先のことで改善

するようなレベルの赤字ではありませんので、この大幅なマイナスを改善するのは現在のシステムでは無理だと判断しました。そこでまず当時の医学部長の渡邊先生に相談して、英文雑誌をペーパーレス化してオンラインジャーナルのみにし、さらにその後現在の医学部長の盛田先生と相談して和文雑誌もペーパーレス化してオンラインジャーナルのみにすることにしました。その結果約 200 万円ほどの経費が削減でき、東邦医学会から大幅な赤字を補填していただけことができなくなりました。この改革が実行できたのは、紙媒体の廃止を快く了承していただいた東邦医学会雑誌編集委員および東邦医学会運営委員の先生方のご協力の賜物だと思っております。また私が編集委員長時代に東邦医学会雑誌の運営に貢献できた唯一のことだと思っております。

東邦医学会雑誌はこのようにオンラインジャーナルとして生まれ変わりました。今後は船戸編集委員長がどのような新しい企画などを立ち上げて、東邦医学会雑誌をさらに発展させて行くのか楽しみです。最後になりましたが、編集委員長としての大役をつつがなくこなすことができたのは、杏林舎の及川様をはじめとした杏林舎のスタッフの方々、東邦医学会事務局の大谷様、またご多忙にもかかわらず論文の査読者の選定や採択の可否に尽力していただいた東邦医学会雑誌編集委員の先生方のおかげだと思っております。この場をかりて御礼申し上げます。

令和5年5月10日

## 東邦医学会雑誌 編集委員長就任のご挨拶

船戸 弘正

東邦大学医学部解剖学講座微細形態学分野

2023年4月より中野裕康先生の後任として東邦医学会雑誌編集委員長を拝命いたしました医学部解剖学講座微細形態学分野の船戸でございます。2023年で第70巻になる東邦医学会雑誌、Volume9となる Toho Journal of Medicine の編集責任者を担当させていただくことは大変光栄であるとともに、気の引き締まる思いであります。

東邦医学会雑誌は、和文原著論文はもちろん巻頭言、教室紹介、論評などが各号に掲載され医学部教員の学術的な魅力やアクティビティをわかりやすく発信する場となっています。また、東邦医学会関連の受賞講演や特別講演も掲載されるほか、例年3月発刊号には退職される教授のご業績が紹介されます。英文専門誌の Toho Journal of Medicine は2015年に、当時の編集委員長であった杉山篤先生のご尽力により、それまで和文と英文の混合誌であった東邦医学会雑誌から英文論文を独立させる形で創刊され、今年で9年目になります。この4年ほどは比較的にコンスタントに原著論文が掲載されており、本学発の学術的貢献やエビデンスの発信の場として確立しています。また、多くの大学院生が Toho Journal of Medicine 掲載論文によって学位を取得しておりますので、研究人材の育成の場としての役割を担っています。東邦医学会雑誌と Toho Journal of Medicine の両誌とも本学学術リポジトリから公開されるオープンアクセスとなっています。さらに、前編集委員長である中野先生のご尽力により両誌とも完全に電子化されました。このような動向は、多くの医学部関連学術団体が発行する学術誌に共通するものであり、時代の変化をいち早く取り入れています。

世界の学術雑誌の動向に目を転じますと、世界的な研究者人口の広がりや背景に、学術雑誌数は3万誌を超え、さらに毎年5%程度増加しています。増え続ける学術雑誌が互いに存続をかけて争う結果、多くの研究者には毎日多数

の投稿リクエストメールが届き、掲載料が高騰し、いわゆるハゲタカジャーナル問題が認知されるようになってきました。このような状況の中で、しっかり学内の支持をいただき、誠実に適正に学術論文を発信し続けていくとともに、学内の学術交流の場としての役割を果たし、ひいては医学部の研究アクティビティの向上に資することが両誌の役割であり、それを支援することが編集委員長ならびに編集委員のミッションと考えております。

編集委員長の交代と編集委員任期が重なり、2023年度には多くの編集委員の交代がありました。Toho Journal of Medicine は臨床研究に関する論文が多く掲載されることから、編集委員10名の内訳は、基礎系3名、臨床系7名となっています。基礎系は、三上哲夫先生（病理学講座）と村上義孝先生（社会医学講座医療統計学分野）が新たに就任され、内藤篤彦先生（生理学講座細胞生理学分野）には継続をお願いいたしました。臨床系は、佐野厚先生（外科学講座呼吸器外科学分野（佐倉））と田中京子先生（産科婦人科学講座（大橋））が新たに就任され、大塚由一郎先生（外科学講座一般・消化器外科学分野（大森））、狩野修先生（内科学講座神経内科学分野（大森））、高橋寛先生（整形外科学講座（大森））、南木敏宏先生（内科学講座膠原病学分野（大森））、松田尚久先生（内科学講座消化器内科学分野（大森））には継続をお願いいたしました。前編集委員長の中野裕康先生（生化学講座）、津熊久幸先生（医学情報学研究室）には編集顧問として大所高所からご意見を頂きたいと思っております。編集委員の先生方にはご多忙の中、多大なご苦勞をおかけすることになりますが、ご協力の程よろしくをお願いいたします。多くの方に支えて頂きながら、この3年間を乗り切れるよう努力したいと思います。会員の皆様、ご支援の程、どうぞよろしくをお願いいたします。